

本

書評同人
五十嵐太郎
Taro Igarashi

苅部直
Tadashi Karube

小池昌代
Masayo Koike

聴覚を揺さぶられる文体。

今回取り上げる二冊のうち、一方は若い書き手の踊るような音楽的小説、一方が成熟した書き手の、生々しく重量感のあるクジラの詩集。一見、対照的ながら、いずれも、今という時代の側面を鮮やかに映し出し、その文体が刺激的だ。

町屋良平『シヨパンゾンビ・コンテスト』を、私は「音楽言語」の試みとして読んだ。芥川賞を受けた、前作『1R1分34秒』はボクサーの話だが、この作家の特徴を表す、面白い描写があった。「ぼく」が、試合前に連日みる夢のなかで、「ぼく」はいつの間にか小説をかいてる。一作しあげた以外は、書き出しだけで滞っている。

「関係」を描くのは確かにうまい。「シヨパンゾンビ・コンテスト」にも、敵対してしかるべきなのに、絶対、そんなことにはならない二人の人間が描かれた。「ぼく」と「源元」だ。彼らは同じ音大のピアノ科仲間だった。ところが「ぼく」は、音大を半年でやめ、人生をかけてきたピアノをあつさり捨てて、今はバイトをしながら小説を書く。父親は、かつてローンを組んで「ぼく」のためにグランドピアノを買った。あーあ、という状況だ。この「ぼく」だけでも小説が立

ち上がりそう。一方の「源元」はピアノを続け、コンクールにも出場するほどの才能でありながら、ムラツク気あり、必ずしも結果が出ない。「ぼく」は「源元」の彼女・潮里を好きになってしまい、しかし潮里は源元が好きで、源元はそういう一切をわかっている。いわば三角関係だが、それが小説のメインテーマにならないところが、この小説の新しさだろう。中心にあるのは、むしろ小説「言葉」と音楽という抽象的二者の関係のほうかもしれない。「ぼく」に小説を書けと、そのかしたのは、そもそも「源元」かいてみたら？ と言われ

て、「ぼく」はいうのだ。

かかないでしょ、ふつう。小説なんて、ばかみたい、といった。音楽に比べたら小説なんて。あんな愚鈍な営み。だけどぼくはいつの間にか小説をかいている。一作しあげた以外は、書き出しだけで滞っている。

そう、「ぼく」は、なかなかうまく書き出せない。所々に、「という書き出しをかいて〇〇にみせると」という類の文章が現れ、この小説の中に彼の書いている書き出しが組み込まれていく。つまり作者がこの作品を書いていくなかで、「ぼく」も応募作の書き出しを書き直しているという構造だ。

本作の書き出しは素晴らしい。

「お前のこと、かいていい。」

あたらしい小説に、とたずねると、かれは「いいよ」べつに、と応えた。

小さなことだが「あたらしい小説に」と「べつに」というところが、鉤括弧から漏れている。漏れているから、心の中で思ったのかという、そうではなく、やはり人が喋った言葉。ならばなぜ、同じ鉤括弧に入れなかったのか。わからないが、これはこの作家の発明。このほう



シヨパンゾンビ・コンテスト
町屋良平/新潮社/1595円

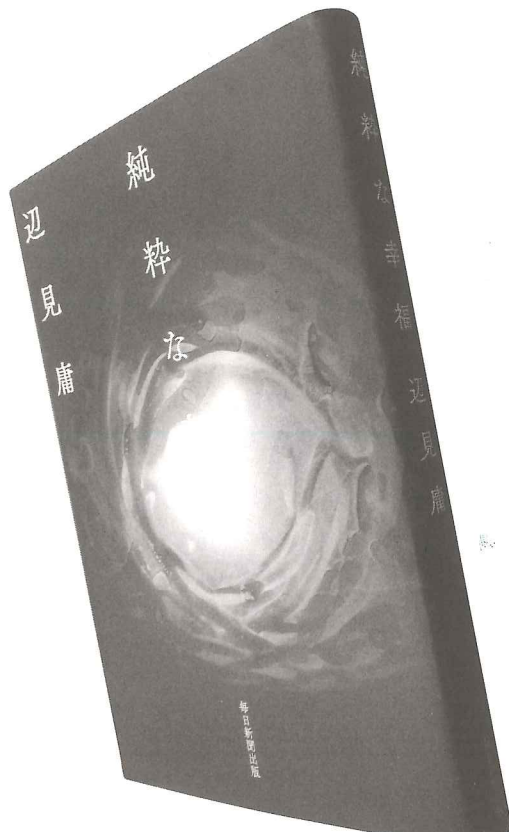
小池昌代

詩人、小説家

がいい。わたしは読者は、括弧内の言葉と、括弧から外れた言葉を、頭の中で融合させて読む。そのとき、言葉と言葉がぶつかって響く。音楽である。

わん響く。意味の取り難いところがあるが、作者が経験したこと、読んだもの、会った人、あらゆるもののイメージが、言葉の中に降り注いでいると感じた。作者自身になり得ない読者は、私を含め全体像をついに理解し得ないだろう。しかし詩の言葉は、私たちが排除しない。何度か読むうちには、ここにある言葉を、生きる力に変換できるのではないかと感じた。現代詩の前線は、常に若く成熟しない。しかしこの詩集は、書法において若々しく破壊的でありながら、老いという成熟を正面から引き受け過激に落ちていく。その姿に揺さぶられる。

シメさん、オバツツァンの内面に、急角度で入っていく書き手の姿勢には異様な迫力がある。「純粋な幸福」は、取り立てて介護をテーマに持つものではないが、社会の中で、人をときに分断させるものとして働く「臭い」から、目ならぬ鼻をそらさず、具体的に表現している。「夜がひかる街」では匂わないサルスベリと、匂うハナミズキを嗅ぎ分け、「馬のなかの夜と港」では「蒸れた糞と泥んこ」と馬の汗の、消えのこるにおいが、何十年も鼻孔にはある」と書く。最後の「IV 純粋な幸福」は圧倒的だ。アカイヌの鍋の臭い、鯨油くさい自転車、死せるクジラの、松林に垂れ下がるむらぎもの、腐臭。純粋な幸福という抽象概念が、真水のごとく作品を流れていく。●



純粋な幸福
辺見庸/毎日新聞出版/2200円